近現代における外来語「ポイント」の変遷

石　　暘暘

キーワード:外来語、変遷、具体的な概念、抽象的な概念

要旨

本稿は「ポイント」を対象とし、近現代における意味変遷の過程、特に抽象的な意味の変遷過程を明らかにすることを目的とする。その上で、変遷におこった現象についても検討した。その結果、1880年代半ば以降、限られた分野での具象的な意味「軌道を切り替える装置」などが日本語に見られるようになる。1960年代には、一般的な分野で抽象的な意味「物事にある重要なところ」が見られるようになる。1990年代以降、日本語内の独自の用法「サービスをもらえる得点」が生じてくる。

1．はじめに

明治以降、外来語は西洋の先進的な技術、思想の受容に伴って借用されることが知られている。特に現代になると、抽象的な外来語の使用が顕著になっている。佐竹秀雄(2002:207)は、「外来語の増加という事実は、具体的な物から抽象的な概念へと外来語の使用領域の広がりがあってこそ起こり得た」と述べている。

このように外来語の研究において、抽象的な外来語の変化は大きな問題の一つであるが、その変遷については、具体的な様相が明らかになっていない部分も多いと言える。

そこで、本稿は「ポイント」を対象とし、意味変遷の過程を明らかにする。

(1)古河駅近くで列車脱線原因はポイントの誤操作　　(『読売新聞』1897)

(2)本番までにどれだけ修正できるかがポイントだ。　　(『毎日新聞』2010)

(1)の「ポイント」は明治時代に見られるもので、「軌道を切り替える装置」という具体的な概念を表す意味である。(2)は現代日本語においてよく耳にする「ポイント」の用法であり、(1)の具体的な概念と異なり、「要点」という抽象的な概念を表す意味である。すなわち、「ポイント」には、具体的な概念から抽象的な概念への変化が窺える。本稿では、(1)から(2)の意味になるまで、どのような意味変遷があったのか、特に、(2)のような抽象的な意味はどのように用いられるようになるのか、変遷にどのよう

な現象がおこったのかを明らかにすることを目的とする。

2．先行研究

抽象的な外来語についての議論について、まず問題になるのは量的な側面である。橋本和佳(2010)による現代日本語における外来語の量の推移の研究が挙げられる。これは、20世紀の新聞社説を対象とした通時的な調査により、外来語の増加過程を描いたものである。結果の一つとして、現代における抽象的な外来語の増加が社説における外来語の量的増加に寄与していることが指摘される。

一方、抽象的な外来語の質的な側面についての研究には、変化のプロセスを捉えようとする論がある。まず、意味の変化について研究したものには、金愛蘭(2006ab、2008、2011、2012)が挙げられる。そこでは「トラブル」「ケース」が扱われている。金愛蘭(2012)によれば、1960年代ごろには抽象的な外来語「トラブル」には「デキゴトのトラブル」の意味のみが見られたが、1980年代以降になると、「関係のトラブル」、「機械のトラブル」、「身体のトラブル」、「運営のトラブル」、「事件のトラブル」というほかの5つの意味が見られるようになる。以上のように、1960年代以降、抽象的な外来語「トラブル」に意味の拡大が見られることがわかる。次に、分野の変化について研究したものには、井上博文(2011)が挙げられる。国語辞書類に載せられる抽象的な意味「コミュニケーション」の項目を歴史的に整理し、日本語への定着過程を明らかにした。1955年ごろ教育関係の学術辞典の項目として設けられた「コミュニケーション」は、1973年になると一般的な辞書に記されるようになり、「研究分野の専門用語と日常語の交渉過程が見られる」と指摘した(p. 25)。以上のように、1970年代ごろ、抽象的な外来語が専門分野から一般的な分野へ広がったことがわかる。

以上の先行研究より、抽象的な外来語には、特に1960・1970年代ごろにおいて、意味の拡大、専門用語から一般的な用語への広がりという変化が見られる。しかし、これらの先行研究は、調査対象資料の時代や分野が限られており、いつ日本語の中に受容され、抽象的な意味がいつごろからどのように拡大するのか、またその過程でどのような変化がおこったといえるのか、といった点については触れていない。この点は詳しい検討が必要であると思われる。

この方向について検討したものとしては石暘暘(2018)がある。そこでは、「センス」を取り上げ、日本語での意味変遷を明らかにした。その上で、英語「sense」と対照して、日本語化が発生したことを明らかにした。ただし、このような検討はさらに必要

であり、今回は「ポイント」という語を取り上げ検討する。

調査は明治から昭和初期の文学作品が多く収録される「全文検索システム『ひまわり』の『青空文庫』パッケージ」『太陽コーパス』『近代女性雑誌』(国立国語研究所)、近現代の名作文学が収録される『CD－ROM版:新潮文庫の100冊』(新潮社)によって行う。また、新聞資料については、読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」(明治－昭和)、『CD:毎日新聞データ集』(毎日新聞社)を調査する。

3．日本への受容初期(1880年代半ば－1950年代半ば)

3－1．受容初期の前期(1880年代半ば－1920年代初)

日本語における「ポイント」は1880年代半ばから見られるようになる

(3)解らんポイント〔ところ〕も屡屡あるが。　(「当世書生気質」坪内逍遥1885)

(3)の「ポイント」は後ろに「ところ」という注釈があるように、問題の解けないところを指し、「物事の中にある特定のところ」という意味と考えられる。本稿では、この「物事の中にある特定のところ」を意味①とする。

次に見られるものは、1890年代以降の例である。

(4)ポイントに置き石、上野発の終列車が脱線した。　(「読売新聞」朝刊1890.09.16)

(5)ポイント式活字(九ポイント)発売広告　(「読売新聞」朝刊1905.01.06)

(4)は列車が音を立てて、軌道を切り替える装置の上を通った、ということを述べている。この「ポイント」は軌道を切り替える装置、分岐器というものである。(5)は印刷用の活字の販売広告である。活字の大きさの表示には1ポイントは0.3514ミリメートルとするポイント式があり、この「ポイント」は活字の大きさの単位である。本稿では、(4)の「軌道を切り替える装置」を意味②、(5)の「活字の大きさの単位」を意味③とする。また、意味②、③は、それぞれ鉄道、印刷の分野に用いられることが分かる。

このうちの(3)は英語の翻訳家であった坪内逍遥が意図的に注釈を付け加えた使用例であり、意味①のそのほかの例はこの時期には見られず、この段階で意味①の使用は特殊であり、一

表1　1880年代半ば－1920年代初における「ポイント」の使用

新聞記事			文学作品			
年	②	③		①	②	③
1890	1		1885	1		
1891	1		1901		8	
1892	1		1907		1	
1894	1		1912		1	
1895	1		1916			1
1897	6		1917			1
1898	5		1923			1
1899	7					
1900	5					
1901	6					
1902	5					
1905	4	1				
1906	3					
1907	4					
1908	1					
1909	2	2				
1910	5					
1911	2					
1917		2				
1918		1				
1923		1				

般性があったわけではないように思われる。すなわち、1880年代半ばから1920年代初までのこの時期において、「ポイント」は(4)(5)のように、意味②③のみで日本に用いられていることがわかる。

ここで、この時期の各意味の使用を表1に示す。表1より、この時期における「ポイント」は分岐器という具体的な物を表す意味②と、活字の具体的な大きさを表す意味③として、日本語の中で用いられるようになることがわかる。特に、意味②の使用が新聞記事にも、文学作品にも多いこともわかる。

以上、1880年代から1920年代にかけては、「ポイント」の日本語への受容が始まり、具体的な概念を表す意味②③が日本語に見られるようになった。また、この時期における意味②③はそれぞれ、鉄道、印刷の分野に用いられている。

3－2. 受容初期の後期(1920年代半ば－1950年代半ば)

意味②③のみで用いられた前期と異なり、1920年代半ば以降になると、以下の新しい用法が見られるようになる。

(6)横浜正金銀行は、年内物の建値より対英対米とも一ポイント引き下げたが、…。
(「読売新聞」朝刊1924.08.03)

(7)摂氏四度の水銀は、比重十三ポイント六なるごとき
(宮沢賢治「春と修羅」1926青空文庫)

(8)博士は何か細かい数字を盛んに筆記した。「…、全つまりＳＳ五〇一がやっぱり四ポイント九〇、五〇二が五ポイント一八、…」
(海野十三「地球盗難」『ラヂオ科学』1936青空文庫)

(9)亜細亜の西の端を「ノーダル・ポイント」といい、東方文明と西方文明とが結びつけられ、何れともつかぬ所もしくは両方についた所ともいい得べき場所柄だと称している。 (新渡戸稲造「東西相触れて」1928青空文庫)

(6)の「一ポイント」は「1%」であり、この「ポイント」は「パーセント」と解釈できる。また、この時期において、(6)と同じ用法は、すべて金融関係の文脈で見られる。(7)(8)の「十三ポイント六」「四ポイント九〇」は「13.6」「4.90」であり、この「ポイント」は「小数点」を指している。また、この時期において、(7)は宮沢賢治の科学に関わる文脈であり、ほかの「小数点」という意味の用例はすべて(8)のように、科学解説者である海野十三の作品であるため、この時期において、文学作品にしか見られない「小数点」という意味の使用は科学の分野に限られていると思われる。(9)の文脈を見ると、「ノー

ダル・ポイント」は亜細亜の西の端にあって、アジアの西の端の東方文明と西方文明を結ぶ地点であることがわかる。この「ポイント」は「地点」という意味と考えられる。本稿では、(6)の「パーセント」を意味④、(7)(8)の「小数点」を意味⑤、(9)の「地点」を意味⑥とする。

一方、以上に見られる新しい意味④～⑥のほかに、1930年代以降になると、意味①の使用には、次のようなものが見られる。

(10)学位論文として著者が自身をもって提出するほどのものでなんらか斯学に貢献するポイントをもたないようなものは極めて稀であろうと思われるのである。　(寺田寅彦「学位について」『改造』1934青空文庫)

(11)極めて多くの人間が生活のどんなポイントでそれてゆくものか、そのポイントに自分が立ってみなければ分らない…。

(宮本百合子「獄中への手紙」1938青空文庫)

(10)の「ポイント」は「論文の中にある貢献するところ」と解釈でき、(11)の「ポイント」は「生活の中にあるそれていくところ」と解釈できる。この「ポイント」は、前期の(3)と同じ、「物事の中にある特定のところ」という意味と考えられる。すなわち、(10)(11)は意味①の用法である。だが、このうち(10)は東京帝国大の物理学者である寺田寅彦の使用例で、学術論文という学術の分野に関係する文脈であり、ほかに意味①の用例はすべて日本女子大学英文科中退という経歴がある宮本百合子の作品である。このため、この時期に見られる意味①の使用は前期と同じく、まだ一般性があったわけではないように思われる。すなわち、1920年代半ばから1950年代半ばまで、「ポイント」には、新しい意味④～⑥が追加され、日本語に用いられるようになると言える。[1]

表2　1920年代半ば－1950年代半ばにおける「ポイント」の使用

新聞記事			文学作品					
	②	④		①	②	③	⑤	⑥
1927		6	1925					
1930	1	1	1926				3	
1931		1	1928					1
1932		4	1929					
1933		10	1934	1			2	
1935		1	1935	3				
1936		9	1936				5	
1937		5	1937		3			
1938		19	1938			2		
1939		6	1940					1
1940		6	1941	1				1
1950	1		1943			4		
1951	1		1947			4		
1952		1	1948			1		
1954			1949	2				
			1951			1		
			1954	1				
			1955	1	2			

この時期における「ポイント」の各意味の使用を表2に示す。この時期における「ポイント」は、前期の具体な概念を表す意味②③が用いられ続けるほかに、小数の記号を表す意味⑤、地点を表す意味⑥ような具体的な概念を表すものも見られるようになる。また、この時期の新聞記事で圧倒的に多く用いられる意味④「パーセント」は具体的な物を表す概念ではな

いが、使用が金融分野に限られている。

以上より、1880年代半ばから1950年代までにかけて、「ポイント」は具体的な概念を表す意味からはじまり、限られた分野で受容されるようになると言える。本稿は、この時期を受容初期とする。より具体的にみると、まず、1880年代半ばから1920年代初頭まで、具体的な概念を表す意味「軌道を切り替える装置」、「活字の大きさの単位」がそれぞれ鉄道、印刷の分野で用いられるようになる。次に、1920年代半ばから1950年代半ばまでの時期には、新しい具体的な概念を表す意味「小数点」「地点」が見られる。また具体的な概念ではない「パーセント」も見られるようになるが、金融関係の専門用語として用いられている。この二つの異なる時期をそれぞれ、受容初期の前期、受容初期の後期とする。

4．日本への受容の進行期（1950年代半ば－1980年代末）

4－1．抽象的な意味への拡張

具体的な概念を表す意味が用いられる前期とことなり、1950年代半ば以降になると、抽象的な概念を表す意味が見られるようになる。次のようなものである。

(12) この春は特に目にポイントにおいて、神秘的な美しさを表現するようにしてみましょう。（「読売新聞」1956. 03. 26朝刊）

(13) この初勝利に投手起用がポイントだ。（「読売新聞」1962. 05. 19朝刊）

(14) こんごは診療報酬の地域差徹廃、生活保護基準の引き上げ、国保の給付改善のための財源調整などがポイントになってきた。（「読売新聞」1962. 12. 28朝刊）

(12)は春の女性の全体メイクにおいて目が重要である、ということを述べている。この「ポイント」は「物事（メイク）の中にある重要なところ」である。(13)(14)は投手の作用、財源調整の内容が重要であるということを述べて、この「ポイント」も「物事の中にある重要なところ」という意味と考えられる。

さて、この(12)(13)(14)の「物事の中にある重要なところ」という意味は、前期に見られる意味①「物事の中にある特定のところ」とかなり似ているように思われるが、ここでその差異を検討する。

(15) 農民生活を題材としても、その文学のねらう、主要なポイントは、プロレタリア文学が所期するのと同じ方向に一致させようと、常に努力されて来ている。

（「農民文学の問題」黒島伝治1970青空文庫）

(15)の「主要なポイント」は「主要な、文学の中にある狙うところ」と解釈でき、「主要

な、物事の中にある特定のところ」という意味と考えられるため、その中の「ポイント」は「物事の中にある特定のところ」という意味と思われる。すなわち、意味①の用法である。(15)の意味①の「ポイント」自体には「重要」の含意を持っておらず、連体修飾語「主要な」を伴っている。一方、(12)(13)(14)の「ポイント」は、「物事の中にある重要なところ」という意味で、「ポイント」自体に「重要」という含意があり、連体修飾語を伴わずに単独で働いている。すなわち、(12)(13)(14)の「ポイント」は(15)の意味①と似ているが、違う意味と構文で働いていることがわかる。本稿では、(12)(13)(14)のような意味を(15)の意味①と区別するために、「物事の中にある重要なところ」を意味⑦とする。

また、この時期における「ポイント」には、以上の抽象的な意味⑦のほかに、次のような新しい用法も見られるようになる。

(16)テニスのポイントは1点をフィフティーンと呼ぶ。

(「読売新聞」1959.10.18朝刊)

(17)日本女子は、シンガポールに勝ったが、五戦全勝同士の中国には大関が1ポイントをあげただけで1－3で敗れた。 (「読売新聞」1972.09.06朝刊)

(16)(17)の「ポイント」は試合の得点のことを指し、この「ポイント」は「得点」という意味と考えられる。また、(16)(17)と同じ用法は、スポーツの分野に限られている。本稿では、この「試合の得点」を意味⑧とする。

次に、この時期における「ポイント」の各意味の使用数を表3に示す。

表3 1950年代半ば－1980年代末における「ポイント」の使用

	新聞記事						文学作品			
	②	④	⑥	⑦	⑧		①	②	③	⑧
1956～1960	1		1	13	1	1956～1960	1		1	1
1961～1965	18	1	1	80		1966～1970	1	1		
1966～1970	23	3		176						
1971～1975	19			166	3					
1976～1980	30	1	1	171	15					
1981～1985	24	4	4	218	26					
1986～1989	6	5	1	409	13					

表3から、この時期、前期に見られる意味②④⑥がそのまま用いられ続けているほかに、新しい意味⑦⑧が見られるようになることがわかる。意味①③が文学作品のみに一部見られることもわかる。また、1960年代以降、抽象的な概念を表す意味⑦の使用が急増し、圧倒的に多く用いられるようになる。

4－2．各意味の使用分野

この時期における各意味の使用分野を把握するために、新聞における各意味の紙面を調査し、表4に示す。表4より、意味②「軌道を切り替える装置」が社会面に、意味④

表4　1950年代半ば－1980年代末の新聞記事における各意味の紙面

	②	④	⑥	⑦	⑧
経済面		14		414	
生活面			1	238	
社会面	121		1	154	
スポーツ面			1	106	58
政治面				93	
国際面			2	57	
文化面			3	14	
ほか：社説、広告				157	

「パーセント」が経済面に、意味⑧「試合の得点」がスポーツ面に限られるのと異なり、抽象的な意味⑦「物事にある重要なところ」は、「経済面」「政治面」「国際面」「スポーツ面」のような専門性が高いもののほかに、「生活面」「社会面」「文化面」のような総合的な紙面にも見られる。また、「社説」「広告」にも見られる。すなわち、抽象的な意味⑦は特定の分野に限られるわけではない。

以上、1950年代半ばから1980年代末までにかけては、「具体的な概念、限られた分野」という前期の性質と異なり、「抽象的な概念、一般的な分野」という性質が顕著になっている。具体的に言うと、抽象的な概念を表す意味⑦「物事の中にある重要なところ」が現れ、1960年代以降、使用が急増して、「ポイント」の主な意味として用いられるようになる。また、意味⑦の使用は特定の分野に限られることなく、一般的に用いられていることもわかる。すなわち、この時期における「ポイント」の受容が続き、抽象的な概念が受容され、一般的な分野に用いられるようになる。本稿ではこの時期を受容の進行期とする。

5．意味派生の発生期（1990年代以降）

1990年代以降、次のような用法が見られるようになる。

(18)「…、公共料金の引き落としで一点、百万円以上の定期で三点というポイント制を導入、高得点の顧客には金利をサービスする」など、早くも顧客の囲い込み策を検討中だ。　（「読売新聞」1991.06.06朝刊）

(19)ライブドア：ポイント制の株主優待制度導入。…。1ポイント＝1円相当。

（「毎日新聞」2005.03.23朝刊）

(18)の「ポイント」は金利をもらえる得点を指し、「ポイント」は「商業のサービスをもらえる得点」という意味と考えられる。(19)は多くの株を買えば買うほど、1円相当の得点がより多くもらえることを指す。「ポイント」も「サービスをもらえる得点」の意味である。「商業のサービス」と「得点」という二つの要素をもつ。

この(18)(19)は前期の意味⑧「試合の得点」に関連していると考えられるため、(18)(19)の「サービスをもらえる得点」を意味⑧′とする。さらに比べてみると、「試合の得点」という意味⑧から、「試合」という要素が脱落し、「得点」という要素が引き継

がれる一方、「商業のサービス」という新しい要素が追加されれば、「商業のサービス」と「得点」で構成される意味⑧′が生まれることになる。

さらに、意味⑧′が現れて以降、複合語「ポイントカード」が見られるようになる。

(20)私の行っている献血ルームでもポイントカードでポイントを集めて、いろいろな商品がもらえた。 (「毎日新聞」2005.04.24朝刊)

(20)の「ポイントカード」は会員カードとして積算された得点でサービスを受けられるものを指し、「サービスをもらえる得点を貯める札」という意味と考えられる。

以上(20)の「ポイントカード」は「ポイント」と「カード」という二つの語要素で「サービスをもらえる得点を貯める札」という意味になる。このうち、「カード」は札であるから、「サービスをもらえる得点」の意は「ポイント」が持つと思われる。すなわち、「ポイントカード」の造語成分となる「ポイント」は意味⑧′の「サービスをもらえる得点」の用法である。これは、意味⑧′で造語成分として用いられることで、意味⑧′は十分に定着しているということを意味すると言える。

この時期における各意味の使用数を表5に示す。「毎日新聞」を対象とする。

表5 1990年代以降の新聞記事における「ポイント」の使用

	②	③	④	⑥	⑦	⑧	⑧'
1995	10		248	24	242	47	5
2005	3	1	397	11	235	89	813
2010	7		408	3	182	73	135

表5によって、この時期における「ポイント」には、意味④⑦⑧′の使用が多く見られるようになる。

以上、1990年代以降、商業の分野にかかわる意味⑧′「サービスをもらえる得点」が派生してくるようになる。その後、それが十分に定着した上で、造語成分として、複合語を作り出した。なお、ほかの意味の使用分野は前期と同じで、特に変化が見られない。前期と同じく、意味②「軌道を切り替える装置」、意味③「活字の大きさの単位」、意味⑧「試合の得点」は鉄道、印刷、スポーツの分野に関わり、意味④「パーセント」は金融分野の用語として用いられ続けている。

6. 変遷に見られる言語現象

ここまで見てきたように、「ポイント」の変遷過程が明らかになった。しかし、外来語である「ポイント」の変遷に存在する言語現象を考えるには、原語と関係を把握する必要がある。そこで、英語資料である「OED」(Oxford English Dictionary, オックスフォード英語辞典)、1810年からの言語データが収録される「COHA」(Corpus of Historical American English, アメリカ英語歴史コーパス)、と1980年以降の英語資料「BNC」(British National Corpus, 現代イギリス英語国立コーパス)を対象とする。

6－1．「日本語化」

「OED」に見られるpointの意味を表6に示す。(行末は日本語訳の添付である)

表6 「OED」に載るpointの各意味と日本語「ポイント」の各意味の対照

	Eng. point	Jap. ポイント
名詞・抽象的な意味	1 opinion/fact意見/事実	
	2 main idea要点	⑦ 物事にある重要なところ
	3 purpose目的	
	4 a particular detail特定のところ	① 物事にある特定のところ
	5 a particular quality or feature that sb/sth has特徴	
	6 a particular time or stage of development特定の時間、段階	
名詞・具体的な意味	7 place場所	⑥ 地点
	8 one of the marks of direction around a compass コンパス周りの方向マーク	
	9 an individual unit that adds to a score in a game or sports competition試合、ゲームの得点	⑧ 試合の得点
	10 a mark or unit on a scale of measurement 測定規模のマークまたは単位	④ パーセント
	11 the dot that separates a whole number from the part that comes after it ドット	⑤ 小数点
	12 sharp end尖った端	
	13 land (a narrow piece of land that stretches into the sea) 島	
	14 a very small dot of light or colour 小さな光や色のドット	
	15 a piece of equipment can be connected to electricity電気に接続できるところ	
	16 in ballet 16 points=pointeバレエで16点＝ポルテ	
	17 a piece of track at place where a railway that can moved to allow a train to change tracks転轍機	② 軌道を切り替える装置
	18 size of letters in printing活字の大きさの単位	③ 活字の大きさの単位
動詞	19 show with finger指で指す	
	20 aim目指す	
	21 face direction顔の向き	
	22 lead toつながる	
	23 show the way方向を指す	
英語無		⑧′サービスをもらえる得点

表6から、英語pointは、名詞18種類と動詞5種類の意味を持つことがわかる。また、日本語「ポイント」の意味には、意味⑧′以外に、意味①～⑧は英語pointにある意味であることが見られる。すなわち、意味⑧′は英語pointにないものであり、日本語内の

独自の用法であることがわかる。このような英語にないものが日本語内に生まれてきたという現象について、石綿敏雄(2001)は「日本語化」と称し、「日本語化」は外国語が外来語になる上で欠かせない過程であり、外来語の受容と変容の過程に見られる現象であると指摘している。本稿は、それにしたがって、「ポイント」の変遷に見られる英語にないものが日本語内に生まれてきたという現象を「日本語化」とする。

6－2. 受容のパターン

さらに、ここまで見られてきた「ポイント」の意味は、英語pointからどのように受容されるのだろうか。「ポイント」の受容初期である20世紀初頭、進行期である1950年代、変化期である2000年代において、年代ごとに各400例をサンプリングして、英語pointの各時代における用法を見てみる。結果を表7に示す。

表7　1900・1950・2000年代における英語「point」の各意味の使用数(サンプリング)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19-23
1900	24	55	16	15	15	23	54	2	14	9	10	48	11	24	3	0	6	15	57
1950	29	47	8	31	20	24	44	0	21	2	31	33	4	36	6	1	3	24	36
2000	19	61	17	28	24	23	41	0	16	9	26	32	6	19	1	0	3	15	61

表7から、英語pointにはどの年代でも意味1～18までの名詞の用法と19～23の動詞の用法が見られ、意味変化はないと考えられる。また、抽象的な意味を表す英語2「要点」の使用がどの時代でも最も多いこともわかる。

この表7の結果を踏まえ、日本語「ポイント」の受容パターンを以下に示す。

(一)受容初期における「ポイント」は具体的な意味「鉄道の分岐器」「活字の大きさの単位」として日本語に見られるようになることがわかる。すなわち、「ポイント」は、英語に多く用いられる抽象的な意味ではなく、具体的な概念を表す意味から受容されはじめている。

(二)受容の進行期における「ポイント」には、抽象的な意味「物事にある重要なところ」という意味が現れることがわかる。すなわち、「ポイント」は、抽象的な概念を表す意味として、受容され続けている。

(三)派生期における「ポイント」は、「サービスをもらえる得点」という日本語内の独自の用法が見られるようになる。すなわち、「ポイント」には変容の発生が見られる。

以上、「ポイント」の受容段階が明らかになった。これは、「具体的な概念の受容－抽象的な概念の受容－変容の発生」というパターンであると結論づけられる。

7．まとめ

以上のことをふまえ、外来語「ポイント」の変遷を以下のようにまとめる。

1)受容初期(1880年代半ば－1950年代半ば)

英語の具体的な概念を表す意味から受容されはじめ、限られた分野に用いられる段階である。1880年代半ばから1920年代初まで、具体的な概念を表す意味②③が鉄道、印刷の分野にかかわって用いられる前期と、1920年代半ばから1950年代半ばまで、具体的な概念ではないが、金融関係の専門用語とする意味④が見られるようになる後期に分けられる。

2)受容の進行期(1950年代半ば－1980年代末)

英語の抽象的な意味から受容され続け、一般的な分野に用いられる段階である。1950年代半ば以降「物事の中にある重要なところ」という抽象的な概念を表す意味が見られるようになり、特に1960年代以降急増している。また、使用は特定の分野に限られることがない。

3)変化の発生期(1990年代以降)

英語にない意味が現れて、「日本語化」という意味の変容が発生する時期である。英語にない「商業のサービスをもらえる得点」という意味は、スポーツに限られる「試合の得点」という意味から生じたものである。

以上のように、「ポイント」の変遷過程を明らかにした。さらに、英語pointと対照することによって、「ポイント」の変遷に「日本語化」という現象が見られることがわかった。また、「ポイント」の受容において、「具体的な概念の受容－抽象的な概念の受容－変容の発生」というパターンが見られることも明らかになった。

注

1　筆者の今回の調査範囲では、次のようなものも見られる。

＊バンド芯を入れて作り、縫目は裏側の中央になる様にし圖の如く上前だけポイント〔剱形〕にして『第六圖』飾釦をつけスナップでとめます。（「婦人倶楽部」1925近代女性雑誌）

＊鉄砲を持って犬を連れてゆく、獲物がいると犬はすぐにポイントする。銃の仕度をして追えというと飛び出してゆく。（「犬」1929青空文庫）

以上の例文によって、「ポイント」には「尖った形の縫目」、「猟犬が前肢の一方をあげ、獲物を注視する」という二つの意味をもつことがわかる。だが、今回の調査範囲では、この二つの意味とするほかの例は見られず、普通に用いられるものだと思われないため、本稿ではこれらの意味を1項としてたてることはしない。

調査資料

Corpus of Historical American English　https://corpus.byu.edu/coha/
British National Corpus (BYU－BNC)　https://corpus.byu.edu/bnc/
「ヨミダス歴史館」 https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan
国立国語研究所編『太陽コーパス－雑誌『太陽』日本語データベース』博文館新社　2005
国立国語研究所編『『青空文庫』パッケージ』(20171001)
新潮社製作「新潮文庫の100冊:CD－ROM版」新潮社　1995
毎日新聞社「CD－毎日新聞データ集」日外アソシエーツ　1995, 2005, 2010

参考文献

井上博文(2011)「外来語コミュニケーション」の受容の諸相」『学大国文』54
石綿敏雄(2001)『外来語の総合的研究』東京堂
金　愛蘭(2006a)「外来語「トラブル」の基本語化—20世紀後半の新聞記事における—」『日本語の研究』2(2)
金　愛蘭(2006b)「新聞の基本外来語「ケース」の意味・用法—類義語「事例」「例」「場合」との比較—」『計量国語学』25(5)
金　愛蘭(2008)「新聞における外来語の基本語化とその要因」『日本語学』27(1)
金　愛蘭(2011)「20世紀後半の新聞語彙における外来語の基本語化」『阪大日本語研究』別冊3(2)
金　愛蘭(2012)「外来語の基本語化」『外来語研究の新展開』おうふう
佐竹秀雄(2002)「新聞の生活家庭面における外来語」玉村文郎編『日本語学と言語学』明治書院
石　暘暘(2018)「近現代における外来語「センス」の変遷」『文芸研究』184
橋本和佳(2010)『現代日本語における外来語の量的推移に関する研究』ひつじ書房

－東北大学大学院生－